

### 3 明治時代の天沼

#### (1) 明治維新と天沼村

行政の混乱 官軍が江戸城にはいって、京から天子様を迎え、江戸の町が東京になる。明治四(一七)年に廃藩置県が行われた前後の、わずか数年間に変わった目まぐるしい天沼村の管轄構造を並べるだけでも、尋常でない施政の混乱ぶりがうかがえる。

武蔵県多摩郡天沼村↓品川県多摩郡天沼村↓東京府多摩郡天沼村↓

神奈川県多摩郡天沼村↓東京府第八大区六小区天沼村……

あろうことか、天沼村は神奈川県下に編入されたこともあったのである。もっとも、その期間は、明治五(一七)年の一月から八月までと半年余りだった。

同年に政府が全国一斉に調査した壬申戸籍の天沼村の戸数は七四(僧侶二)、人口は男一九二、女二〇八、計四〇〇人で、数字としては五〇年前とさほど変わらない。

天沼村の苦難 何事もお上のおやりになること、徳川様の御代も、天朝様の御代も、百姓の日々の営みに何の変わりようがあるはずもないと思っていた天沼村の農民たちに、深刻な事態が待ち受けていた。

大政奉還の結果、山王領でなくなった天沼村は、明治七(一七)年にはほかの村々と同様の土地の査定を受け、これまでの年貢の対象田畑五五町六反歩のほかに、約二四町歩の隠し田畑が発見された。しかも、従来の優遇措置はすべて消失して一律税率となったので、課税は一举に山王領時代の三倍近くまでは上がったのである。このため、かつて村名主や年寄役を勤めたほどの旧家が、あい次いで没落の憂き目をみたといわれる。

明治初年の天沼の村勢 「東京府志料」によって、明治七(一七)年の天沼村の村勢を見ると、農車二四、農事用馬八、田四町歩強、畑七六町歩弱となっている。主な産物としては、米四八石、大麦三二〇石、小麦一一〇石、大豆三・六石、小豆二・二五石、ヒエ一五〇石、ソバ三五石、干大根二〇駄、芋一五〇駄、アイ(藍)二五〇貫、クリ二・一石、カキ二五荷、杉丸太四〇〇本、薪四二〇〇束、ホウキ草一万六〇〇本、鶏卵三六〇〇個。その他、ゴボウ・ウリ・ウド・クリ・カキ・竹などが挙げられている。

天沼付近の農村では、明治初年から染料用の藍葉の栽培が奨励されていて、それは輸入化学染料が普及する明治三十(一八九七)年ごろまでつづいた。大根は水で泥洗いして八、九本ずつ編んだものを矢来につるして干し、明治中期からはたくあん漬けにして盛んに出荷された。

杉並区域は旧幕時代から杉丸太の産地で、四谷を経由して江戸市中へ運んだので「四谷丸太」として有名だった。天沼でも、杉は防風林を兼ねて盛んに栽培され、植えて二〇年ぐらいで足場丸太として出荷し、良質のものは残して磨き丸太にした。

野菜類は「せんだいもの」といわれ、薪とともに市中で売りさばかれ、日銭がはいる農閑期の仕事として貴重だった。農産物の平均価格は米一石約四円、ヒエ約一円である。

天沼農民のとんだ災難 森泰樹さんの『杉並風土記』に、明治八(一八七五)年にあったわ

明治時代の杉並小史

元(一八七〇)年 江戸を東京と改める。杉並区域は武蔵県となり、県知事に古賀一平が就任。

二(一八七二)年 杉並区域は品川県になる。東京が首都になる。

新宿―田無間の青梅街道に乗合馬車が開通。

三(一八七三)年 玉川上水路に羽村―四谷大木戸間の航路開設。

四(一八七四)年 杉並区域が東京府に編入。

五(一八七五)年 杉並区域が神奈川県に編入されるが、八か月で東京府の管轄にもどる。

玉川上水の通船廃止。学制が発布される。

六(一八七六)年 杉並区域は府内朱引外東京(府下)第八大区になる。

七(一八七七)年 杉並区域

二〇か村の戸数一七三六戸、人口九四六三人となる。

八(一八七八)年 郊西学校 宮前慈宏寺、高泉学校 上高井戸医王寺、

桃園第一分校 馬橋清見寺、第二分校 上井草葉王院が開校する。

九(一八七九)年 桃園第一分校は桃野学校、第二分校は桃井学校と改称する。授業料月五銭。

十(一八八〇)年 杉並区域は東京府東多摩郡となる。

十二(一八八二)年 杉並区域の旧二〇か村は六連合村に編成される。

十三(一八八三)年 甲州街道の四谷―府中間に乗合馬車が開通。

大宮学校が開校。十四(一八八四)年 新宿警察署が創設され、杉並

区域も管内にはいる。高明学校が開校。

十五(一八八三年) このころ、堀之内妙法寺参道内の料理屋・商店にガス灯がつく。

十六(一八八三年) 明治天皇が荻窪の中田邸で御休止になる。

十七(一八八四年) 成田学校(現杉二)・入徳学校が開校。

二十一(一八八八年) 杉並区域二〇か村の戸数は一九五九戸、人口一万一五三一人となる。

二十二(一八八九年) 甲武鉄道の新宿―立川間に汽車が開通。

旧一五区が東京市になり、旧二〇か村は杉並・井荻・高井戸・堀之内の四か村に統合。

二十四(一九〇二年) 甲武鉄道の荻窪駅が開業。

二十五(一九〇三年) 青梅街道の乗合馬車廃業。

二十六(一九〇三年) 郊西・高泉学校を統合して

高井戸小学校が新設。

二十七(一九〇四年) 日清戦争が始まる。

二十九(一九〇六年) 東多摩郡と豊島郡が合併して豊多摩郡となる。

三十六(一九〇三年) 青梅街道に妙法寺大灯籠が

が国最初の駐車違反の話が紹介されている。

馬に荷を積んで東京に出かけた天沼村の大熊勇吉さんが、茶店わきの電柱に馬の手綱をくくりつけて弁当をとっていると、通りかかった巡査にいきなり、「おかみの電信柱に馬をつなぐとはけしからん」と、そのまま連行されて牢屋にぶちこまれてしまった。

東京府第八大区六小区

証

天沼村五十三番地

一金七拾五錢

大熊勇吉

右之通り罰金奉上納候也

其ノ方儀、電信柱木へ馬

明治八年十月十二日

繋グ科電信条例第六条ニ

第八大区六小区

照ラシ情ヲ量リ罰金七拾

天沼村五十三番地

五錢申付ル

大熊勇吉

明治八年十月十二日

右村組頭 佐藤庄左衛門

東京 裁判所 印

東京府 御裁判所

わせる官憲の高圧的な、だがそれでいてどこかユーモラスな、こんな天沼村の資料も残してくれている。

## (2) 教育と行政区分

学制の発布 明治五(一八七〇)年、政府は学制を発布して、全国を八つの大学区に分け、

それぞれに三二の中学区を設け、さらに中学区を二一〇ずつの小学区に分けて、各大学区に大学校一、各中学区に中学校一、各小学区に小学校一を置くという基本大綱を示した。天沼村は第一大学区第三中学区第六小学区に属した。

### 桃野学校の誕生

明治八(一八七五年)に、中野村の宝仙寺を仮校舎として第六小学区第九

番公立桃園学校(現中野区立桃園第一小学校の前身)が開校した。しかし、杉並区域からは遠すぎるので、桃園学校一番分校が馬橋村の清見寺(通学範囲は馬橋・高円寺・阿佐ヶ谷・天沼・田端・成宗村)、二番分校が上井草村の薬王院薬師堂(上井草・下井草・上荻窪・下荻窪村)に設置された。

このとき杉並区域では、ほかに郊西学校(五日市街道沿いの地区)と高泉学校(甲州街道沿いの地区)が開校している。そして翌九(一八七六年)に、桃園学校一番分校は第三中学区第二十五番公

立桃野学校、二番分校は第二十六番公立桃井学校として、それぞれ独立した。現在の杉並第一小学校、桃井第一小学校の前身である。

学校は上・下等に分けられ、下等は六歳から九歳、上等は八歳から一三歳とされていたが、上等まで進む者は少なかった。学科は修身・読書・習字・算術の四科目だった。

明治十七(一八八四年)、桃野学校が阿佐ヶ谷村(杉一の現在地)に新築され、天沼村からの通学が楽になったはずだが、何人ぐらい通ったか分かっていない。同じ年、成田学校(杉二の前身)が開校して成宗村・田端村の児童がそちらへ移り、また、高円寺村に桃野学校の分教場(杉三の前身)が開校された。蓮華寺に天沼



桃野学校のあった清見寺

できる。

三十七(一八四四年) 日露

戦争が始まる。

四十二(一八七〇年) 大宮・

入徳両校を統合して、

大宮小学校を新設。

四十一(一八七〇年) 小学

校の授業料は月に尋常

科一〇銭、高等科四〇

〇五〇銭となる。

四十二(一八七〇年) 井荻

購買信用組合(現東邦

信用金庫)設立。

四十五(一九〇三年) 蚕糸

試験場が開場する。

明治時代の杉並区域の  
人口の推移 (人)

明治5年 九五六三

明治21年 一一五三八

明治30年 一三〇〇四

明治35年 一三三〇六

明治40年 一四二七一

明治45年 一四四七一

### 明治時代の農事曆

上井草村の小美野郡

蔵さんの日記をもとに

した(明治32年)曆。

二月 甘藷苗床作り、

麦の追肥(わらじ作り、

縄ない、むしろ織り、

山掃除、薪売り)

三月 陸稲の刈り取っ

た根を掘り出す、畑う

ない、藍床作り、麦の

中耕、茶畑の施肥(屋

根ふき、道こしらえ、

落ち葉かき、杉枝おろ

し、わらじ作り)

四月 田うない、畦あ

げ、苗に施肥、馬鈴薯

植付け、麦の二番中耕、

甘藷の苗床入れ、トウ

ナス苗木作り(もちつ

ぎ、川さらい、井戸替

え、米つき、麦ひき、

引割ひき)

五月 苗代かき、摘田

種籾まき、里芋植付け、

分教場ができるのに先立つこと三三年前で  
ある。杉並区域は高円寺村のほうから人が  
増えていったことが分かる。

### 義務教育四年制

明治十九(一八八〇年)に小

学校令が公布されて尋常小学・高等小学に

分かれ、それぞれ修業年限は四年間、尋常

小学は義務教育になった。明治二十一(一八

〇年現在の記録に残る桃野小学校の学区は

天沼・阿佐ヶ谷・馬橋・高円寺村の四か村

で、尋常小学の該当児童数は三八三、実際

に通学した児童は二三一名、就学率六〇・

三パーセントで、杉並区域では桃井小学校

に次いで二番目に高かった。

東多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

多摩郡天沼村 明治十一(一八七〇年、東

部は荏原・東多摩・南豊島・北豊島・南足立・南葛飾の六郡となった。天沼村など杉並  
区域の二〇か村は東京府東多摩郡に属し、中野村に東多摩郡役場が設置された。

これと同時に大区小区制が廃され、数村を連合して一戸長と戸長役場を持つ連合村が  
組織された。杉並区域は、次のような六つの連合村に分かれている。

- ① 和田村・堀之内村・和泉村・永福寺村の四村連合、
- ② 高円寺村・馬橋村・阿佐ヶ谷  
村・天沼村の四村連合、
- ③ 成宗村・田端村・上荻窪村・下荻窪村の四村連合、
- ④ 上井草  
村・下井草村の二村連合、
- ⑤ 上高井戸村・下高井戸村の二村連合、
- ⑥ 大宮前新田・中高  
井戸村・久我山村・松庵村の四村連合、である。

### (3) 甲武鉄道の開通

#### 青梅街道の乗合馬車

天沼付近の交通機関としては、明治二(一八六七年)に中野村の深沢

幸治郎さんが、日本橋―新宿―青梅街道―田無―所沢―扇町屋(翁玉真入間市)までの間を一

日一往復した、一頭立て乗合馬車が最初である。郵便業務のかたわら客も乗せた。天沼

の人々が交通手段にそれほど利用したとは思えないが、青梅街道を走るトテ馬車の姿

は、文明開化を象徴するものとして、人々に愛されたにちがいない。

甲武鉄道の路線 明治二十二(一八六七年)四月、新宿―立川間を甲武鉄道株式会社経営の

汽車が運転を始め、八月には立川―八王子間も開通した。品川―横浜間に陸蒸気が走っ

てから一七年後のことである。

終点を八王子にするこの鉄道計画は、路線の決定をみるまでがとにかく大変だった。

東多摩郡時代の天沼付近の地図(明治13年)



トウナス植付け、モロ  
コン播種、キュウリ植  
付け、大豆播種、藍に  
施肥・植付け、カブ播  
種・茶摘み・製茶、甘  
藷の苗植付け(米つき、  
芋・麦売却)

六月 草刈り、畑に施  
肥、麦刈り、三つ葉播  
種、麦藁作り、ナス植  
付け、麦打ち、ホウキ  
草植付け、藍の植床耕  
し、一番肥え、サク切  
り、二番茶摘み(桑葉  
刈り)

七月 畦草刈り、田草  
入れ、キビ施肥・二番  
作切り、藍摘み、あと  
に粟播種・作切り、大  
根播種(粉ひき)

八月 テビ作り、稲植  
える、モチ草刈り、草  
刈り、甘藷つる返し↓  
二番作切り、蕎麦施肥  
・播種、馬鈴薯取入れ

大根うなう↓施肥、ナ  
ス施肥・大ぐるみ、小  
豆もぐ、白瓜収穫、粟  
二番作切り、キビ刈り、  
麦乾燥、藍刈入れ↓乾  
燥↓葉打ち、桑葉刈り  
(道草刈り)

九月 陸稲収穫、大根  
に下肥施肥・土寄せ、  
ホウキこぐ、キビ収穫  
・脱穀(藍売却)

十月 陸稲収穫、稲こ  
ぎ、藍ガラ抜く、モロ  
コン収穫、畑耕起、麦  
堆肥・播種、蕎麦二番  
切り(麦つき、陸稲打  
穀)

十一月 陸稲収穫、穴  
蔵掘り、蕎麦収穫、矢  
来作り、大根収穫、蕎  
麦打ち、粉ひき、稲こ  
ぎ、米つき、蕎麦ひき

十二月 甘藷穴蔵土盛  
り、大根矢来かけ、大  
根あらひ、八頭・小芋

新宿から甲州街道沿いに敷設する最初のプランは、沿道住民の「鉄道が来ると宿場客が減るうえに、蒸気機関車の煙害でクワの葉がやられる、火の粉がわら屋根に燃え移る」などのムシロ旗を立てての猛反対にあって断念し、次に青梅街道沿いの二次案が検討された。しかし、これも田無宿の住民総決起にあい、測量隊の立ち入りすらできなかった。そこでやむなく、住民の少ない武蔵野台地の原野を一直線に敷設する第三案が、現路線として実現したのである。

結果的にみればこの路線が最も建設コストが安かったが、見込める利用客数は最低だった。もしも第一次案が採用されていたとしたら、天沼をはじめ荻窪・阿佐ヶ谷・中野など青梅街道沿いの村々の発展は、ずっと後れたものになっていただろう。

**運賃と主要駅** 開通当時の停車場は、新宿―中野―境―国分寺―立川で、四か月遅れて立川―日野―八王子が通った。天沼から鉄道を利用するためには、中野駅まで出なければならなかった。

開通二年後の記録によると、英国ウィルソン社製一B一型タンク機関車が客車をつないだ列車は、新宿―八王子間を一時間一三分かけて一日五往復した。平均時速は約三〇キロである。運賃は上等・中等・下等の三段階に分かれ、新宿―中野間で上等九銭、中等六銭、下等三銭で、新宿―八王子間はその一〇倍と、べらぼうに高かった。

しかも、当時の多摩地区は神奈川県だったから、境武蔵境以西の駅名に東京の人々はなじみが薄かった。甲武鉄道では、新聞に何回も沿線広告案内を出した。目玉商品は、

小金井堤の桜並木だった。「境停車場より北五六町、玉川上水堀の兩岸にあり。東は境村に始まり、西は小川村に至る。この間二里余、兩岸すべて桜樹なり。数千株に及べり」と、開通ポスターにある。事実、小金井の桜は甲武鉄道のドル箱だった。桜の季節になると、人々は境駅から川べりの桜に押しかけ、国分寺駅までの花見を楽しんだ。国有化後もこの傾向はつづき、大正三(一九一四年)の境駅の四月の乗降客は二万六六〇〇人で、他の月の二倍以上にはね上がっている。要するに、鉄道経営にとってこの路線は、ほかにさして魅力的なものがあったということであろう。

#### (4) 荻窪駅の開設

**主目的は貨物駅** 明治二十四(一九一一年)の末、上荻窪村・下荻窪村・天沼村の接点ともいべき、青梅街道と線路が交差する近くに、甲武鉄道第八番目の駅として荻窪駅が開設された。杉並区域で最初にできた鉄道駅である。駅の開設が天沼村にどんな変化をもたらすものか、当時、自覚していた村人はそれほど多くなかったにちがいない。鉄道会社の期待も、乗降利用者のためというよりは、この駅を周辺地区の物資の集散拠点にすることのほうが大きかったようである。そうはいうものの、青梅街道を走っていた乗合馬車は荻窪駅の開設で利用客をがくつと失い、まもなく廃業してしまった。

**タブレット運転** 開設当初の駅舎は南口だけで跨線橋はなく、天沼村からの利用客は青梅街道の踏切を渡って行って切符を買った。

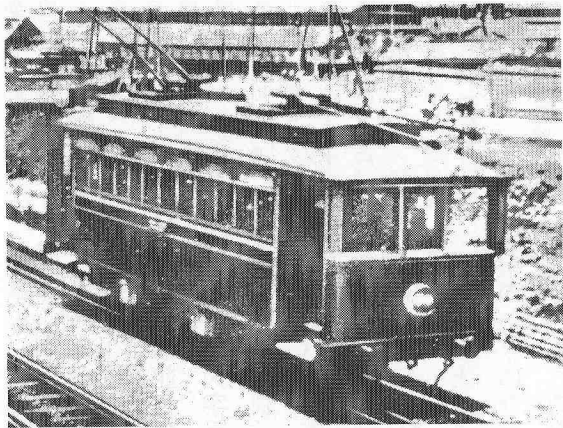
矢嶋又次さん(後述)の記録によると、駅舎は平屋建てで間口三間(約五・四メートル)、奥行



埋め俵しぼり、餅糴打穀、ワリ麦俵入れ、堆肥作り、ネワラ切り、下掃除場所下見、下掃除代支払い、麦ヒキワリ作業)

一月 大根収穫↓出荷  
畑耕起、置肥(キビつき、糯米俵にする、竹くね結い、杉根わり、もちつき、スス払い)  
〔新修杉並区史〕か  
ら)

甲武鉄道の電車  
明治三十七年(一九〇四)に飯田町―中野間を走った電車は路面電車と構造や性能も大差なく、四輪単車で二本ずつのトロリーポールを持っていた。車体全長一〇メートル、定員五八名で自重七・一八トン、四〇〇五〇馬力のモーター二個を有した。現在では、甲武鉄道時代の電車は松本電鉄に一台残されているだけである。



明治37年の甲武電車(形式デ9633)

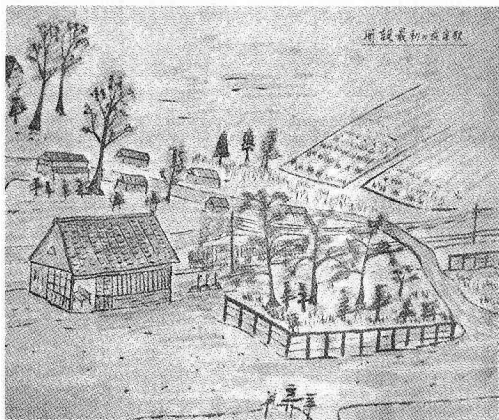
二間半で、待合室は四坪(三・二四平方メートル)程度であった。

駅でもランプを使っており、夕方になると駅員が遠くの信号機まで歩いてランプを入れに行った。駅にも手動式の信号機があった。単線運転のため、列車がホームに着くと、必ず機関士がタブレットを駅員に手渡し、出発時には別のタブレットを受け取っていた。タブレットとは、衝突事故を避けるために、列車が次の駅まで進行できるあかしとして駅長から機関士に交付する証標のことである。

乗降客は明治の末までずっと一日平均一三〇人程度で、いつも閑散としていたが、荻窪駅には乗降客のホームとは別に、北側に貨物専用のホームがあった。大きな蒸気機関車が、

貨車の入替え作業を毎日行っていた。当時は青梅街道の踏切が駅のすぐ近くであったため作業に不便なので、後に踏切の位置が一〇〇メートルほど東に移された。移動した踏切の位置が、現在、線路をくぐっている地下道の場所である。踏切が東に移ったことによって、四面道のほうから利用する人は大回りしなくてはならなかった。慣れた人は線路を歩いて、直接ホームに上がるのが普通だったそうだ。

開業当時の荻窪駅(矢嶋又次さんの絵)



汽車は二時間ぐらいの間隔なので、乗り遅れたら、中野へ行くのには歩いたほうが早く着いた。客車は片側に一〇室ぐらいの狭い部屋に仕切っており、一室ごとにドアがあった。客車二両のほかに貨物車も連結していた。

駅の北側には細い貨物の出入口があり、荷車や荷馬車が出入りしていた。到着荷物は農業用の必需品が多く、米糠、大豆粕、植木、薪炭、石材などで、出荷はたくあん大根が多かった。ホームの両側にはカラタチの垣根が一〇メートルほどつづき、子どもたちはその実を取るのが楽しみだったそうである。また、駅の東側は大きな植込みになっていて、春は桜がみごとだったという。

甲武鉄道が中央線に 明治二十八(一九〇五)年、甲武鉄道は市街線の新宿―信濃町―四谷―牛込―飯田町間が完成して、営業区間が八王子―飯田町間の一四駅、総延長三三・六キロになった。

甲武鉄道に初めて電車が走ったのは、明治三十七(一九〇四)年中野―飯田町間、翌年、御茶の水まで延長された。わが国で同一路線を汽車と電車が併走した最初である。

明治三十九(一九〇六)年、甲武鉄道は国に買収されて中央線の一部となった。日露戦争の軍隊輸送の必要性にたして鉄道の国有化が急がれたため、八王子以西の中央線工事はすでに始められていた。買収時の施設は中野―御茶の水間が複線電化区間、中野―八王子間

新宿鉄道略史

明治十八年(一八八五) 日本鉄道品川線内藤新宿駅開設。雨天の日乗降客皆無。

明治二十二年(一八八七)

甲武鉄道(中央線)の新宿―立川間開通。三十年(一九〇七)ごろ、駅構内でキツネの親子、列車にひかれて死ぬ。

大正四年(一九一五) 京王線新宿三丁目(現交通公社前)―調布間開通。

大正十年(一九二一) 西武軌道会社の路面電車淀橋―荻窪間開通。

大正十四年(一九二五) 新宿駅舎、南口から二幸前へ移転新築。

昭和二年(一九一七) 小田急線新宿―小田原間開通。

は単線、機関車一三両、電車二八両、客車八〇両、貨車二六六両であった。

四十二(一九二七)年から荻窪駅で公衆電信を業務として扱うようになるが、それまでは一日一回の郵便集配が、天沼村の唯一の通信設備であった。

(5) 杉並村の誕生

杉並村大字天沼 甲武鉄道の蒸気機関車が初めて走った明治二十二(一八八七)年の五月、全国的に市制・町村制が実施され、人口一三七万余を有する一五の区部に市制をしいて、東京市が成立した。同じ時期、天沼村は近隣の阿佐ヶ谷・馬橋・高円寺・田端・成宗村と合併して、新しく杉並村が誕生した。これら旧六か村はいずれも青梅街道沿いにあって、そこを流れる桃園川と善福寺川は、ともに下流で神田川と合流する。また、桃野小学校とそこから分かれた成田小学校を六か村で共有するなどの連帯性が、杉並村誕生のかぎになった。このときから、天沼村は杉並村大字天沼に変わったのである。

「杉並」の名称 このときに初めて公に用いられた「杉並」という名称は、江戸時代の初めに旗本岡部氏が成宗・田端両村の領主になったとき、知行地の境界を示す杉並木を青梅街道に沿って植えたことに由来する。文化文政期(一八〇四―一八三〇)にかかれた江戸近郷図には、村の名前とともに、青梅街道わきに「杉並」と記されている。

杉並村が誕生したころ、この杉並木はすでに伐採されて姿を消していたが、このあたりが旧六か村のほぼ中央に位置したこと、どの村もそれぞれ自分の旧村名を残すことにこだわりがあったので、ここに全く別個の「杉並」を、新しい自分たちの村の名称にしたのである。村役場は、阿佐ヶ谷の世尊院の一室を借り受けて開設した。

杉並村誕生と同時に、和田堀之内村(旧堀之内・和田・和泉・永福寺村)、井荻村(旧上井草・下井草・上荻窪・下荻窪村)、高井戸村(旧上高井戸・下高井戸・中高井戸・大宮前新田・久我山・松庵村)が生まれ、それまでの杉並区域二〇か村は、大きく四か村にまとまったのであった。

天沼村最後の資力状況 合併する前年の天沼村資力調査表(明治二十一(一八八七)年)を見ると、戸数八五、人口四四九、荷車五五、馬車七、馬三、田地四・七六町歩、畑地八九・六五町歩、宅地一〇・〇四町歩、山林二九・九七町歩、原野〇・三四町歩となっている。農産物としては粳米一八〇石、糯米二五石、小麦二一〇石、大麦四八四石、ソバ三〇石、ヒエ一一〇石、アワ一二石、キビ五六石、サツマイモ三万七五〇貫があがっており、明治初年の藍葉は調査品目に載っていない。米が増えているのは、陸稲がつけられたからであろうか。

豊多摩郡杉並村大字天沼 明治二十六(一九一三)年に、それまで神奈川県にはいなかった三多摩(北多摩・南多摩・西多摩郡)が東京府に編入され、三十九(一九〇六)年には、杉並村・中野村を含む東多摩郡と、内藤新宿町を含む南豊島郡とが合併して新しく豊多摩郡が設けられ、天沼は東京府豊多摩郡杉並村大字天沼となった。

明治の終わりから大正にかけての杉並区域は、四か村が併立していて、まだ純農村の姿をとどめていたが、しだいに蔬菜や園芸・養鶏・養豚(井荻村では養蚕など商業的な農業)の関心が高まり、農業経営のうえからも近代化の波が押し寄せつつあった。

天沼村資力調査表

下に書いてある天沼村の農産物は、それぞれ次のように金額に換算して、表にしてある。

粳米	七二〇・〇〇円
糯米	一二五・〇〇円
小麦	六九三・〇〇円
大麦	七七四・〇〇円
ソバ	九九・〇〇円
ヒエ	一五四・〇〇円
アワ	二四・〇〇円
キビ	一一二・五〇円
サツマイモ	一八七・五〇円

物産価格合計  
二八八六・〇〇円

本稿は杉並第五小学校創立70周年記念誌「新 天沼・杉五物がたり」から  
著作権者杉五同窓会の許可を受け転載しています。執筆者は元杉五小教諭 人見 稠氏です。